

光記念館 研究紀要 人文科学 2010.3

HIKARU MUSEUM

第6号

平成20・21年度

HIKARU MUSEUM



www.H-AM.jp

目次

書人 右卿の軌跡	5
岡田泰六	
光記念館理事長	
光記念館所蔵資料『国宝 太刀 銘 康次』について	8
吉井隆雄	
光記念館 主任学芸員	
光記念館における国際交流	13
吉井隆雄	
光記念館 主任学芸員	
博物館における教育普及 ～歴史系ワークショップの一考察～	23
松本庸子	
光記念館 学芸員	
浮世絵に見られる帯結びについての一考察	
～光記念館肉筆浮世絵コレクションから～	29
今泉たまみ	
光記念館 学芸員	

書人 右卿の軌跡

岡田泰六

光記念館理事長

本稿は3回連載中「書人 右卿の軌跡」の第3回です

9 節 ——永福町の時代〔一〕《踏月と火華に見る意匠》——

1967年（昭和42）、右卿は住み慣れた代々木上原を引き払って杉並区永福町へと転居した。その環境の変化は、67歳を迎えた右卿の加齢とも重なって作品そのものの変容を促した。その変容は長年の酒とタバコにより胃潰瘍の大病を患ったことにもよるが、永福町時代になると右卿の行状は少しく穏やかとなっていった。死線をさまよい復活した右卿は書線にも穏やかな滋味を感じさせる作品が多くなった。筆者はこの時代を「右卿第二の誕生」と名づけた。

春到来を告げる3月7日から12日まで日本橋三越にて個展開催。「無」「終古一天平」「超」「捨」などを出品した。それまで海外展に次々と新作を発表して話題となり書の世界を拡大したが、永福町の時代となると、創作は個としての内面の深まりを希求するようになる。それまでの意表をつく大胆な作品が少なくなり、古典の持つ規範の中から格の高い作品を顕そうとしたのではあるまいか。

永福町の時代が始まると右卿の運命は不思議に転換し、1968年（昭和43）には書家として初めて「毎日芸術賞」を受賞し、翌、1969年（昭和44）には、右卿の故郷・高知県安芸市より「安芸市名誉市民」に選ばれている。同年1月、手島鷹太郎の子、手島右卿、高松慕真、南不乗による「鷹の子書展」を日本橋高島屋で開催。右卿、慕真、不乗の姓はともに違うが同じ鷹太郎の子で、長じては三人ともに書家となった。慕真は戦前から故郷、高知で「墨線美術協会」を興して後進の指導にあたった。末弟の不乗は東京に居て1941年（昭和16）に「現日」を結成し、代表となって少字数書による自由奔放を標榜して新書芸を展開した。

この年の7月20日には、アメリカの宇宙船「アポロ11号」が人類初の月面着陸を果たした。深夜、筆者は右卿と一緒にテレビに釘付けとなって宇宙飛行士の足、を凝視していた。それは現代史の変わり目を示す映像であった。9月10日よりベルギー国主催「右卿とその一門展」に際して、外務省第一回訪欧書道文化使節団団長として渡欧。ブリュッセル及びアントワープにおいて「崩壊」、「飛」、「燕」、「現生不退」などを出品する。その後ヨーロッパの巡回展として、ロンドン、パリ、ボン、スイス、ローマ、ミラノ、その他で同展を開催、国際的評価を得た。

翌年1970年（昭和45）の5月、日本芸術祭パリ展に「踏月」を出品。全人類が宇宙飛行士の足を見つめていた時、右卿は次なる作品「踏月」を着想していた。右卿は作品を仕上げるために永福町の書斎で何枚も反故を重ねて作品を制作している。

またこの年の11月に作家三島由紀夫が東京市ヶ谷東部方面総監部に乗り込み、自衛隊員の決起を促したが果たせず、日本刀で割腹自殺した。その美学を完成するために絶対者（天皇）が必要だとした主張と共に、死の行為は社会に大きな波紋を広げた。右卿はその時、ある会合に出席するために自宅を出てタクシーに乗っていた。車内のラジオニュースで三島事件を聞いた彼の脳裏に瞬間閃いたものは「火華（火花）」という言葉だった。右卿は運転手にタクシーをすぐに自宅へ帰すよう命じ、着くやいなや2階の書斎へ駆け上がり、古い刷毛の中峰筆を切腹する時の刀のように握り締め、紙をえぐり、叩き、はねて、「火華」と書き上げた。

「その自害の動機が何であるにせよ、あれは人間の魂の火花であった」と右卿は述懐している。右卿は本

来、思想的に右寄りの人間ではなく、むしろ社会主義的左寄りの人間と見られ、自分でもそう信じていた。しかし三島の切腹は、一個の人間の生命を賭した行為であり、主義主張を超えて右卿の心に迫ってきた。彼はその強烈な印象——生命の色彩感とでもいうべきものを「火華」に結実させたのである。「火華」は第15回朝日20人展に出品。作品はその後札幌オリンピック会場貴賓室・現札幌市役所に収蔵された。右卿の作品にはその折々の物語が籠められており、すぐれて鋭敏な感覚が表現されている。



「踏月」

10 節 ——永福町時代〔二〕《九死に一生を得て再び大病を克服》——

右卿は1966年（昭和41）目黒区に日本書道専門学校を設立し学校長となり、臨書へのつきない取り組みが続けられるに至った。

右卿の書業は50年を重ねていた。1971年（昭和46）かねてから書業50年の展観が計画されていたが、人生の起伏をのり越えて自選展を迎える右卿の心境はさぞ感慨深いものがあっただろう。妻みやを始め門人知人の支持があればこそ、半世紀を関する「手島右卿自選展」を11月日本橋三越で執行することができたのである。

1972年（昭和47）1月4日より大阪三越で「書業50年・手島右卿自選展」を開催。翌1973年（昭和48）9月、東京椿山荘美術館において「手島右卿名筆展」を開催する。代表作30余点を展観。1974年（昭和49）五月には高知大丸にて「巨匠右卿書作展」を開催。「翠」「華」「琴」（五絶）「浄山心照」など新作を発表した。11月にはホテルニューオータニ山茶花荘の依頼で「気と神逸」を制作。同年、故郷高知市長浜・秦神社に「長宗我部親先生彰徳碑」を揮毫した。

1975年（昭和50）9月、外務省第二回訪欧文化使節団団長として渡欧。パリ、ベルネーム・ジュヌ画廊において「右卿個展と一門展」を開催した。「龍虎」「嵐」「遊」「車」「山川不老」等を出品する。この海外展には筆者も随行員として同行したが、この頃、右卿はたばこの吸い過ぎが災いして肺気腫がかなり進行していた。フランス滞在中も右卿の体調は芳しくなく、画廊とホテルを往復していたがホテルでは伏せている時間が長かった。しかし、たばこだけは決して手放すことはなかった。それでも使節団長としての任を全うするためにベルギーにも行って、美術関係者と対談し無事帰国した。

1976年（昭和51）1月、第20回朝日20人展に「狂」を出品。第24回独立書展には「慨嘆」を出品した。11

月の第8回日展に「蒼海」を出品。同月、勲三等旭日中綬賞を受ける。翌1977年（昭和52）9月には、高知出身の宰相、吉田茂の銅像題字「吉田茂先生之像」を揮毫し、高知空港に像が建立された。

1978年（昭和53）、前年秋から右卿は体調を崩し、1月の第23回朝日20人展に「南無阿弥陀佛」を書き上げてそのまま東京厚生年金病院に入院した。すでに肺は真っ白に侵され、ニコチン中毒症に罹っており、右卿がどんなに怒っても、家人はたばこを渡すわけにはいかなかった。医師は「たばこを止めなくては生命の保証はできない」と診断したが、それでも右卿はベッドの上で執拗にたばこを求めた。そして5日を過ぎると中毒症が治まったのであろうか、彼はたばこを求めなくなっていた。たばことの絶縁によって右卿はかろうじて九死に一生を得ることが出来たのである。

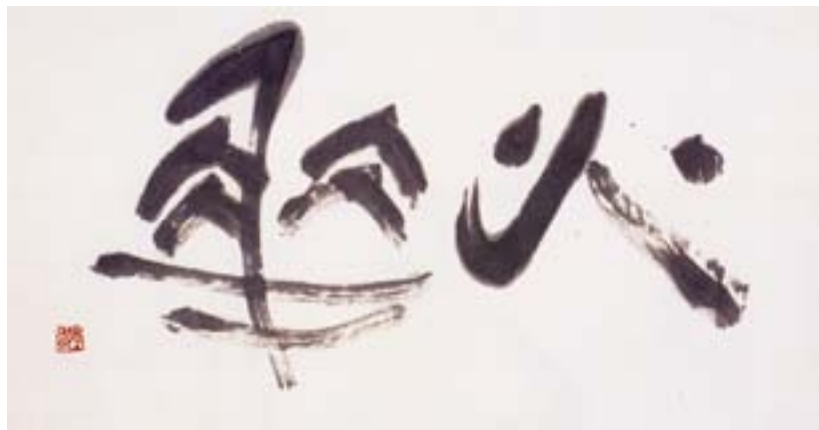
高知にいる弟の高松慕真が亡くなったのは、右卿が自宅療養をしていた11月のことであった。初春からずっと入院していた慕真は、再起を期していたが、胃ガンで67歳の生涯を閉じた。若き日から社会主義者としてその運動にも手を染めたが、戦後、肋膜炎を患ってからはプロの書家として専心し、その理論的卓越性を展開した。なにしろ慕真はマルクスの「資本論」をはじめ、「世界大思想全集」を読破して社会運動に挺身していたのである。自ら「迂人」と称してはいたが、明晰な頭脳は書論にも活かされ、そのエスプリによって多字数書から少字数書の必然性を説いた。すでに1951年（昭和26）5月、室戸岬で記述した「墨線美術の在り方」と題する論稿にはその真髓が理論的に解析されている。

永福町時代の右卿は、酒よりもたばこによって肺気腫が亢進した。呼吸困難に見舞われながらも臨書の方法論の探求と創作が続けられた。右卿は永福町において昭和40年代の象書を次々と生み出した。彼は次のように語っている。

「象書とは必然性をもった書のこと、ふさわしい形の書ということである。発想を表現として煮つめている。それは意象を描くということである。発想は内からの感動、すなわち宇宙観。外からの感動すなわち象美との2つから成立している」——現代書道教室（筑摩書房）

国内的には右卿一門による「少字数書」が怒濤の如くに発表されていた。しかし右卿に言わせれば古典の掘り下げに基づかない外形だけのものが氾濫していたという。右卿はこのような少字数書の流行を批判した。

しかしそのブームの火付け役がほかならぬ右卿自身の象書作品であったのは皮肉である。この二律背反のジレンマから脱出するためにも、古典に立ち戻らなくてはならないと主張した。



「火華」

1 1 節 ――鎌倉の時代〔一〕《臨模と作品の純化》――

重い肺気腫を患っていた右卿は晩年を空気のよい処で過ごしたいと希望し、敬慕した恩師の比田井天来が住んでいた鎌倉に土地を求めた。1979（昭和54）年3月、右卿は鎌倉八幡に隣接し、天来が開いた書学院とは山を一つ隔てた位置にある鎌倉市雪ノ下に転居した。その土地は通称御谷(おやつ)と呼ばれ鎌倉駅と北鎌倉のほぼ中間に位置し、県道から少し奥まった閑静な場所である。

しかし、鎌倉に住み着いた右卿は静養に専念することはせず、早速、近しい知人を招いては月見酒や好きな麻雀などをして周囲の人を驚かせた。書作も旺盛で同年の独立展をはじめ、朝日二十人展などにも出品した。鎌倉での最後の内弟子・高澤翠雲是最晩年になっても右卿はいつも精力的で忙しそうに活動していたと述懐している。いわば右卿は動詞的な人間であった。それは名詞にあふれる日本社会にはそぐわない生き方と言えたかもしれない。特に書の用筆法は厳しく、古代インドのパーリ語ダンマ（法）に通底する。戦車に馬をつなぐ、縛りつける、という厳しい意味の命令形の実践者でもあった。

鎌倉の時代から右卿はしばしば「靈核」とか「靈活」「靈智」という宗教的な言葉を用いるようになった。元来、右卿は社会主義的傾向が強く自分の才と力を信ずる人間で、神仏を信じることはなかった。それが何回もの大病によって死線をさまよい、その経験によって自我の力だけでない何か目に見えざる大自然の唯一つの力を信ずるようになっていた。晩年の靈性への希求は、信仰心厚い妻・みやの影響もあったのであろう。その変化は書作品に如実に現れた。鎌倉時代の右卿芸術は、更なる幽幻と純化を希求するところとなっていくた。

1980（昭和55）年1月、「第24回朝日二十人展」には「松濤」、同月の「第28回独立書展」に「真吼」、11月のイタリア・ヴェニス「今日の日本書展」に「丹鳳」を出品した。

1981（昭和56）年9月には静岡市松坂屋にて「巨匠手島右卿書作展」を開催、「楼」「鏡中花一枝」「歌」「如雲」などの新作33点を展観した。

1982（昭和57）年3月に「北京現代日本書道展覧会」に「龍虎」「崩壊」「燕」「砦」を出品する。5月19日から6月20日まで、アメリカ・ミネソタ州セントポール市セントポール美術館において「手島右卿と一門展」を開催、「崩壊」などの代表作を発表する。同年、8月10日から9月10日まで、アメリカ・イリノイ州エバンストン市ノースウェスタン大学付属ギャラリーにて「手島右卿と一門展」を開催した。

そして11月、右卿は日本国より「文化功労者顕彰」を受ける。古典の臨書と象書の創作に力を注ぎ続けてきた作品群はここに一つの到達点を迎えた。しかし「芸術は無窮なり」と述べた日本画の横山大観の箴言を引用して、右卿は決して筆を折ることなく創作活動を続けた。

1983（昭和58）年、右卿はNHKの「訪問インタビュー」に出演し、現代書に対する基本的な考え方を述べた。5日間にわたる番組で右卿は作品の紹介と書の見方、考え方などを語った。このインタビューでも生来の菌に衣着せぬ発言を繰り返した。若き日の逆境に生きた頃を語った後で「作品は作るものでなく生まれるものだ」と書道ブームを批判した。そして「このままでは美は死ぬ」と警鐘を鳴らした。

その上で「現今の泡のような書道ブームは時が経てば消えてしまう」と預言した。右卿が泡、泡と何回も連発したので、斉藤アナウンサーはたまりかねた様子で、「なぜ今、書が泡なのか」と再質問せざるを得なかった。このとき右卿は「泡（バブル）である。書のブームは必ずはじける」と語ったのである。日本経済はバブル経済に入ったばかりであったが、1990（平成2）年、それまでの書道ブームと機を同じくするようにバブル経済が本当に弾けてしまったのは奇妙な一致であった。

畢竟、右卿がいったかったのは、確固たる基礎――古典の修練なき書道ブームは必ず行き詰まりを迎えると予告したのである。右卿は臨書を超えた「臨模(りんも)に如かず」と語って止まなかった。臨模とは臨書と背臨の併せもったものに他ならない。最晩年の右卿は鎌倉の香象山を背に清浄潔斎の臨模に打ち込んだ。右卿の古典の渉猟は臨書に始まり臨模に帰するということか――終生古典への探求は止むことはなかった。

右卿の書法を語る上で欠かすことのできない要諦――われわれが普遍的に継承できるのは、臨書の方法論

ということになろう。そして、その上に開花した「右卿芸術」はあくまで「個」としての精華であり、たとえ書道学校を修了したとしても、他者が安易に倣えるものではあるまい。

1 2 節 ――鎌倉の時代〔二〕《北京革命歴史博物館の展観》――

1984（昭和59）年、「第28回朝日二十人展」に最後の大作「天戸開人」「光風万里」を創作した。右卿は翌1985（昭和60）年5月、生涯の歴史に遺る個展を中国・北京革命歴史博物館において開催した。「日本手島右卿書法展」への準備は大がかりなものだった。独立書人団と日本書道専門学校が総力を結集して計画した。

ことの始まりは前年秋、NHKで放映された三国志の人形展と、右卿の書作展を北京で同時に開催してはどうかとの話の持ち上がりであった。人形展との併催は観客動員の面で効果的であるとのことが主な理由だが、中国側は対外友好協会において直接主催し、会場もまた外国人に開放させたことのない「革命歴史博物館正庁」を提供する提案をした。右卿はすでに1961（昭和36）年に日本の代表書家のひとりとして中国へ招待されており、中国では「書家・手島右卿」の名は夙に政界・美術界において認知されていた。

はじめ右卿は高齢と健康上の理由で慎重な姿勢を崩さなかった。だが、中国側の再度の要請、好意を受け入れ、書の母国・中国での個展開催を決断した。一般的に海外展を実現するための裏舞台は、費用はもとより大変な時間と労力を要求される。事実、企画・実行・事後処理までの膨大なエネルギーが消費されたのである。1943（昭和18）年から書き続けてきた作品の中から35点が厳選された。展示期間は5月5日より6月6日までの1ヶ月間と中国では異例の長さであった。

開会式は午前10時から行われ、中国側は王震中日友好名誉会長が出席、日本側実行委員長・柳田誠二郎らがテーブルカットした。この展覧会には、皇后陛下の実父である日清製粉名誉会長・正田英三郎の「和」と茶道裏千家の十五代千宗室家元の「平常心之道」も特別出品された。

北京における展観は、右卿芸術の要核を示すことによって中国書壇への大きな刺激を促すことになった。北京市内ばかりでなく、遠く甘粛省から30時間列車に揺られてきた若き書道家もいた。会期中11万人を超す人々が会場に詰め掛け、右卿芸術の掉尾を飾るにふさわしい展覧会となった。ある意味で書の母国北京における成功こそ、書活動最大の成果であったと言えよう。

展観は中国人民に深い感動を呼び醒ましたばかりでなく、書を通じての両国の親善友好に寄与できたことを関係者は喜んだ。北京展を終え、帰国した右卿は一つの大きな使命を終えた安堵感に浸っていた。

翌年の1986（昭和61）年1月の「第34回独立書展」に「運風」（国際連合本部蔵）を出品。7月の「第25回抱土社展」に「蔵」、「第38回毎日書道展」に「望」を出品した。同月、高知県安芸市に岩崎弥太郎生誕150年記念の銅像題字と撰文を揮毫、除幕式に出席した。これが右卿最後の故郷への帰高となった。秋になるとにわかには体調を崩し、腹が痛むというので掛かり付けの鎌倉・清川病院の医師に診察を受けると胃癌であることが判明、即刻入院となった。重病の肺気腫に胃癌が加わった八十五歳の老人が再び元気を取り戻すことは困難であった。

病床にあった右卿は「天命に従う」と短く語ったが、それでも生き続けようとする意志は持ち続いていた。誰でも死は有り得べからざるものであっても、死は確実に迫ってくる。その死と対峙した右卿は、一日を存分に満足して生きたかったのではあるまいか。

しかし、右卿の息一つが自分の思うようにならない。いつ止まるか知れぬ呼吸。押し寄せる停滞感に抗おうとする肉体。だがそれ自体が意識の外の出来事であることを身を以て識ったとき、右卿の想念に去来したものは大いなるものへの畏敬の念であったに違いない。

死の床につく直前に書き上げた絶筆「以虚入盈」は象書の到達点となった。その意味は「己を虚(むな)しくすることによって、盈(み)ちたりた世界に入ることを得る」ということになる。右卿は死の直前に行・草・隸の三体の「以虚入盈」を書き、満ち足りた天上の世界へと還っていった。その隸書作品は中国政府に

寄贈された。行書作品は右卿の遺作展の行われた高知県立郷土文化会館（現高知県立美術館）に寄贈された。そして草書体の作品が手島家に遺された。

「以虚入盈」とともに最晩年に書かれた作品は淡墨の「猫」であった。これなどはまさに猫がそこにいるように見える作品で、右卿は死する直前まで自らの様式美を追求して止まなかった。

すぐれて鋭敏な眼識によって、美の本質を紡ぐ美術評論家の武田厚は次のようにいう。

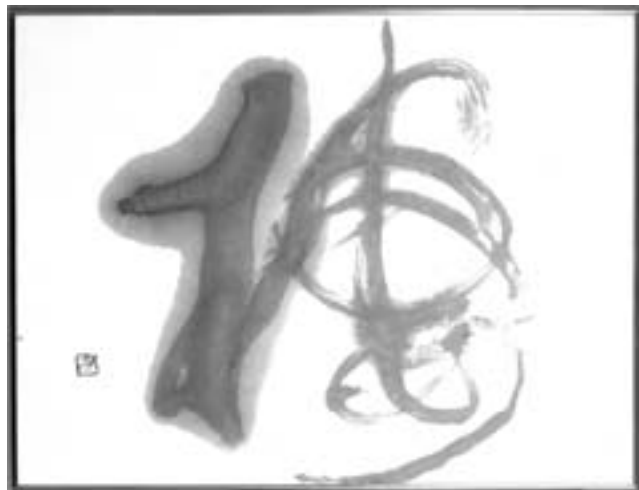
「手島右卿が特に戦後に果たした功績を一言でいうなら、自ら実践し、並外れた成果をおさめるに至った書の表現における領域の開発、あるいは拡張ということだろう。しかしより重要なことは、その根底において貫かれた彼自身による画期的な意識改革といえるものではなかろうか。それも限りなく美術に近接した意識の改革である」——墨150号（芸術新聞社）

世界を駆け巡った右卿の心は、最後には日本の山々に楚々と咲く山桜に帰着したのかもしれない。

高弟の戸田提山がいうように、右卿が晩年に愛したものは、山桜であり、日本酒であり、日本の風土、とりわけ富士山、故郷の山々、そして相撲であった。

「右卿が生涯をかけて求めたものは、自分の心の底に貫通する日本の『いのち』であったのだろう。そして晩年に至って、その志向は一層明確になり、ついに天地自然という宇宙の中に、永久不動の真実を見てとると同時に自己自身は拡大して日本そのものと化し、宇宙自体へと止揚していったと考えられる」——書人 手島右卿の軌跡

右卿は死の床で次のように漏らしていた。「もし又元気になったら山桜の歌を書きたい」と。書の世界性を希求した書家の最後に帰るべき処は、終の住家となった鎌倉の裏山の香象山であった。その桜が咲き始めたとき、すなわち1987（昭和62）年3月27日の「さくらの日」に書人・右卿は86年の生涯を閉じたのである。



「楼」



「真吼」



「以虚入盈」

光記念館所蔵資料『国宝 太刀 銘 康次』について

吉井隆雄

光記念館 主任学芸員

光記念館には国宝、国重要文化財等の国指定文化財並びに重要美術品を数点所蔵している。この度は「国宝 太刀 銘 康次」について資料を紹介する。



1. 国宝とは

日本の文化財保護法によって国が指定した有形文化財（重要文化財）のうち、世界文化の見地から価値の高いもので、類いない国民の宝たるものとして国（文部科学大臣）が指定したものである。建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、考古資料および歴史資料が指定されている。法律的には国宝は重要文化財の一つである。

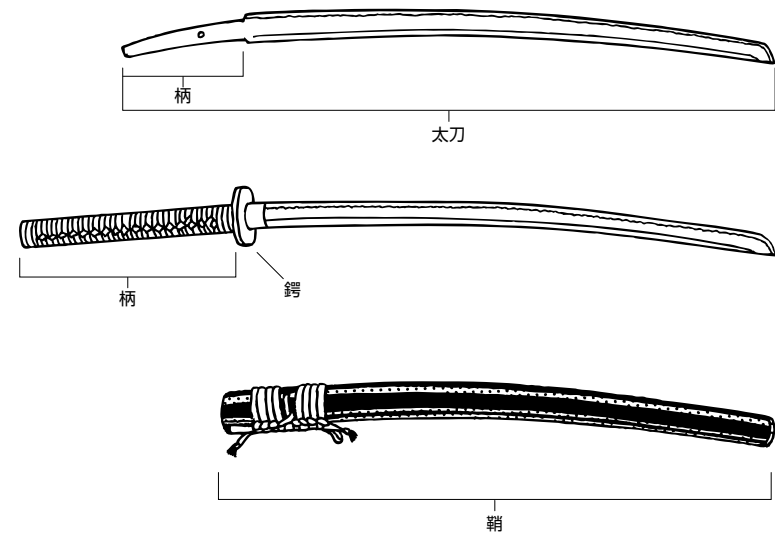
2. 刀とは

古来から武器としての役割と同時に美しい姿が象徴的な意味を持ち、美術品としても評価の高い物が多い。古くから続く血統では権威の証として尊ばれていた。また、武家政権を背景に「武士の魂」として精神文化の支柱として機能した。

その特徴は、"折り返し鍛錬法"で鍛え上げられた鋼を素材とする点と、刀身と茎(なかご)が一体となった構造である。茎には刀身を目釘で柄に固定する為の孔が設けられている。また、日本刀は諸外国の刀剣類と異なり、外装品（拵え）とは別に刀身自体が美術的価値を発揮していることが最大の特徴と言える。

「日本刀」という呼称は、北宋の詩人の詩「日本刀歌」に見られる。この詩の中で、越（華南）の商人が当時既に宝刀と呼ばれていた日本刀を日本まで買い付けに行くことやその外装や容貌などの美術的観点が歌われている。「日本刀歌」の主題は日本刀ではなく、中国では既に散逸してしまった書物が日本には存在しているということを嘆いた詩ではあるが、日本刀の美しさが、平安時代後期～鎌倉時代初期に既に海外の好事家などにも認められており、輸出品の一つとされていたことを示している。

「日本刀」という名称が、日本人にとっての一般的名称として広まったのは幕末以降のことである。幕末以降西欧に流出して評価が高まった日本の絵画が従来の西洋の絵画と区別して「日本画」と呼称されるようになったことに対応して、西洋の刀剣に対して日本刀という呼び方が定着したのである。それ以前は「打刀」あるいは「太刀」という呼称が一般的であった。日本刀は、まず本体である刀身とその外装品である拵え(こしらえ)に分けられ、拵えは鞘、柄、鐔の各部に分けられる。

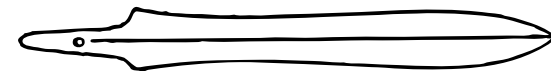


3. 刀の形状

刀は形状によって分類される。簡単に以下の通りである。

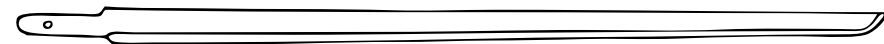
◇剣（けん・つるぎ）

外国からの影響を受けず日本古来の型もこの形状である。刀身に反りがなく、切っ先から刃区および棟区まで完全に両刃となっている造りのものである。



◇直刀（ちよくとう）

「大刀」とも呼ばれる反りのない刀身の作りで、奈良時代頃までの「刀」とはこれを指す。平造りもしくは切刃造りが一般的だが、刀身の先端もしくは刀身の半ばまで両刃となっているものも多くある。直刀に対し平安時代より一般的となった刀身に反りのある刀を「湾刀（わんとう・まがりがたな）」と呼ぶ。



◇小烏丸太刀（こがらすまるたち）

いさもち はづり
鋒両刃造と呼ばれる刀身の造りで、皇室に伝来した際の逸話から特に「小烏丸作り」と呼ばれる。

◇毛抜形太刀（けぬきがたち）

なご つか
茎が柄の役割を兼ねている太刀。柄に茎を差し込んで目釘で固定する一般的な日本刀とは違い、茎部分に装飾を施して直接「柄」として用いる。

◇小太刀（こだち）

刀身の短い太刀。現代の分類では「脇差」との区別は特にされておらず、刃長30cm以上60cm未満のもので刃を下にして佩く刀剣を指す。

◇打刀（うちかたな）

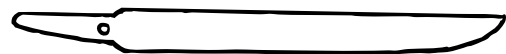
室町時代頃より登場した、反りのある刀身を持ち、刃を上にし帯に差して携行する刀。江戸時代以降一般的な「刀」となる。現代の日本では、単純に「刀」や「日本刀」と言った場合、打刀を指すことが多い。

◇脇差（わきざし）

刀身の短い打刀、または太刀。現代の分類では、脇差は刃長30cm以上60cm未満のものを指す。

◇短刀（たんとう）

元々は全長一尺・一尺二寸（約30-36cm）以下の刀で、現代の分類では、刃長30cm未満のものをいう。



◇鎧通し（よろいどおし）

身幅が狭く重ねが極端に厚く、寸の短い刃長7寸（約21cm）前後で身幅7分（約2.1cm）前後の短刀で、組み打ち時にとっさに抜き鎧の隙間を狙うためのもの。

◇長巻（ながまき）

ほぼ刀身と同じ長さの柄を持つ大太刀。大太刀の柄を延長して取り回し易くした「中巻き」から発展したものの。

◇長巻直し

長巻を基にして刀に造り変えたもの。

◇薙刀（なぎなた）

打刀や太刀の様に湾曲した刀身を持つ、長柄の武器。



◇薙刀直し

薙刀を基にして刀に造り変えたもの。薙刀の刀身形状から、先反りで「鵜の首造り」もしくは「菖蒲造り」の刀身形状になっているものが多い。

◇仕込み刀（しこみかたな）

様々なものに刀身を仕込み、刀であることを偽装した隠し武器。主に杖・煙管・扇子といった日用品などに偽装したものと、他の武器に小さな刀身を仕込み二段構えの武器としたものの二種類がある。

◇槍（やり）

短い刃と長柄を持つ代表的な長柄武器。突きに特化するために両刃の刀身を持ち、折れにくいように分厚く造られ、中には刃の断面がほぼ正三角形のものも存在する。刀と違い中世の合戦まで頻繁に使用された。

4.太刀 銘 康次について

光記念館所蔵の国宝は、上記の分類上の「太刀」にあたる。康次という銘はこの太刀の制作者で古青江派を代表する刀工 康次から付けられた。また、この太刀は織田信長から座を追われた室町幕府第15代將軍足利義昭（1537～1597）が力を借りようとして薩摩の太守 島津義久（1533～1611）に贈ったものと伝えられている。江戸時代に島津家の家紋入り糸巻太刀拵が付けられた。詳細は次の通りである。

指定年月日及び指定番号

昭和30年2月2日 工第165号

刃長85.7cm 反り3.3cm 元幅3.6cm

先幅2.1cm 鋒長3.8cm

鎌倉時代（13世紀）





鑄造り、庵棟、長大で身幅広く、腰反り高く猪首鉾の豪壮な姿の太刀である。鍛えは小板目に杳目少し交じり肌立ち、所々に地班が入り、乱れ映り淡く立っている。刃文は、表は丁子と小乱れが交じり、逆ごころに乱れ、裏は小乱れに小丁子を僅かに交じえ、中ほどに二重もあり、表裏とも焼幅に広狭があり、刃中に足・葉頼りに入り、沸よくつき、所々に金筋がかかる。帽子は乱れ込み先焼き詰め、表は二重刃風となっている。彫物は、表は鑄地に二筋桶を角留めとし、腰の平地に種子（不動明王）と劔形の櫃の中に俱利伽羅竜を彫ってある。裏は棒樋を角留めし、桶中の腰に種子（大日如来）と素劔を彫り、また平地に不動明王像を彫り表している。これは、室町時代以前に信仰のために彫ったものと思われる。

茎は生ぶで、先栗尻、鑢目大筋違、目釘孔一、他に茎先の棟方に手抜きを切り込んでいる。銘は佩裏中程に大きく「康次」とある。

康次は備中国古青江派の刀工恒次の子と伝えられる。鎌倉時代初期の人である。備中の刀匠は主として青江に住んでいたので青江一派と称する。青江は現今の岡山県倉敷市内の北方で、もと都窪群管生村子位といわれた所である。即ち山陽線倉敷駅の北方に位置する。この一派の安次は保安の頃、その子の守次は仁平の頃、つまり平安時代に活躍したといわれる。地理的に見ても作風の上から見ても、備前系統に属するものであって、三代目の貞次、恒次の元暦の頃から一門ようやく繁栄して古青江という一派を為し、作風もやっと備前風を逸脱して、青江風を樹立するに至った。源平時代に有名な藤戸の渡は、青江の付近にあり、すべてこの付近は戦乱のあった土地で、また歴史上有名な武将の出所地であるから、刀劔の需要は備前とは反対に地元で応じたものである。また次の時代に於いても種々の戦乱があつて、作刀の世に現存するものも多い。

足利義昭が薩摩の太守島津義久に贈ったものであり、これには江戸時代に作られた島津家の家紋入りの糸巻太刀拵が付いている。

参考文献

文化庁監修『国宝』8工芸品Ⅲ 関根 望 毎日新聞社
 日本刀の鑑賞基礎知識 小笠原 信夫 至文堂
 週刊朝日百科日本の国宝 山本 信 朝日新聞社
 図解日本刀事典 歴史群像編集部 学研
 図説・日本刀大全 歴史群像シリーズ 学研
 刀匠が教える日本刀の魅力 目の眼ハンドブック 河内 国平 里文出版
 日本刀物語 目の眼ハンドブック 杉浦 良幸 里文出版
 原色日本の美術2 1 佐藤 寒山・尾崎 元春 小学館
 刀劔鑑定のきめ手 柴田 和男 雄山閣

光記念館における国際交流 ～ルクセンブルクにおける北斎展・広重展～

吉井隆雄

光記念館 主任学芸員

1.はじめに

光記念館が行う博物館活動の目的・使命の一つに国際交流、地域貢献等がある。当館は、小企画展ながら平成18年から平成21年まで、ルクセンブルク国アンセンブルグ城で葛飾北斎『富嶽三十六景』、歌川広重『名所江戸百景』の特別展示をさせて頂いた。

この展覧会の事の始めは、アンセンブルグ城の関係者から「EU歴史遺産記念日に、歴史遺産に指定されているルクセンブルク国アンセンブルグ城の庭園一般開放に合わせて、日本美術の紹介をしてほしい」と要望されたからである。その依頼を受け、当館から紹介できる作品として世界に誇る日本美術の代表格「浮世絵」を選定した。そして、各美術館の学芸員や専門家の意見を聞き「浮世絵とジャポニズム」をテーマに決めた。

浮世絵の第一人者といえばやはり北斎や広重であろう。北斎は、1999年に米国の雑誌『ライフ』が行ったアンケート「この1000年間で最も偉大な業績を残した世界の人物100人」の中にただ一人選ばれた日本人であり、世界で最も有名な日本の芸術家である。また、葛飾北斎の風景版画の最大のライバルが歌川広重である事は周知の事実である。



2.ルクセンブルクの歴史と地理

ルクセンブルクは、ベルギー、ドイツ、フランスに囲まれた緑豊かな小国で、面積は約2600km²、人口約49万人である。西岸海洋性気候で夏は涼しく、冬の寒さもそれほど厳しくないで1年を通して比較的過ごしやすいところである。ルクセンブルクには千年以上の歴史があり、10世紀後半にジークフリート伯爵が現在の首都に城を築いたのが始まりである。14世紀から15世紀にかけては、ルクセンブルク家から4人の神聖ローマ帝国皇帝が排出され、またボヘミアやハンガリー王となった者もいた。1354年には伯爵から公領へと昇格するが、その後領土を広げ過ぎて財政難に陥り、フランスなど諸外国の支配を受けることになった。

1815年ウィーン会議の結果、ドイツ連邦に加盟し大公国となり、1867年の会議で領土の獲得・自治権の再

確認が行われ、永世中立国となる。第二次世界大戦では永世中立国にも関わらずドイツ軍に占領され、第二次大戦での戦死者は、世界第3位に挙げられるほどの数にのぼった。戦後はNATOに加盟し、永世中立国を破棄した。

現在のルクセンブルクの経済は世界でトップレベルの豊かさで、国民1人当たりのGDP（国内総生産）は世界有数となっている。また、美しい町並みが残っており、世界遺産にも登録されている。

3.アンセンブルグ城について

ルクセンブルク市周辺にあるアンセンブルグ城は、17～18世紀に製鉄所を所有していたマルシヤン家とアンセンブルグ家の居城で、バロック調の庭園に囲まれている。アンセンブルグ城内、またバロック庭園など、公的・私的部分も含め多くの場所が公開されている。城の庭園はE U（欧州連合）の指定文化財（歴史記念物）に選ばれている。



4.浮世絵とは

浮世絵とは、江戸時代に盛行した庶民的な社会風俗絵画のことをいう。浮世絵は肉筆画と版画に大別することが出来る。肉筆浮世絵は手描きの一点物、浮世絵版画は商業出版物である。浮世絵版画は政治経済の中心地・江戸を舞台に成長した。時が経つにつれ、庶民の求める絵画様式も代わり、彫摺の技術も進歩をとげ、それぞれの時代にあった絵師が次々と登場して人気を集めた。

5.北斎について

葛飾北斎（1760～1849年）は、喜多川歌麿や歌川広重とともに、江戸の浮世絵界を代表する天才的な絵師の一人である。

北斎は、師 勝川春草から許された画名 春朗を皮切りに、宗理、北斎、辰政、戴斗、為一の他、あまたの画号を使用した。そして、自ら画狂人、画狂老人と称し、苦勞の末数々の傑作を生み出した。その名を決定づけた『富嶽三十六景』をはじめ『富嶽百景』『諸国滝廻り』等是不朽の名作といわれている。

6.富嶽三十六景とは

『富嶽三十六景』は、浮世絵の世界に風景版画を確立した葛飾北斎の記念すべき作品である。北斎は70歳になってから本格的に風景版画に取り組み、江戸時代の天保初期（1831年頃）に『富嶽三十六景』を世に出した。これは北斎芸術の集大成ともいうべき作品で、江戸をはじめ様々な地域から眺めた富士が描かれている。

北斎の庶民に対する深い共感から、風景画にしては人物が多く登場していることが特徴で、庶民の生活に

とけ込んでいる富士が身近な風景として描かれ、そこには今日すでに失われてしまった当時の自然と生活の調和を見ることができる。『富嶽三十六景』は「裏富士」と呼ばれる十景十枚を加え、46枚で完結している。当館は『富嶽三十六景』全作品46枚を所蔵しているが、国内の美術館でも全作品揃えているところは少なく8館ほどと聞いている。その意味では、当館の全作品揃いものは貴重である。

7.歌川広重について

江戸時代後期の浮世絵師あたる歌川広重（1797～1858）は、年少で両親を亡くし家督を相続して火消同人職を就きながら、15歳で歌川豊広に入門、浮世絵を学ぶ。27歳で火消同人を引退し、浮世絵師として画業に専心するが、1832年、幕府の「八朔御馬献上」の行列に参加、初めて東海道を旅し、その体験と印象をもとに翌年『東海道五十三次』を発表したと言われている。この作品で爆発的な人気を得て、北斎と共に風景浮世絵師としてその名を轟かせた。

8.名所江戸百景とは

名所江戸百景とは、浮世絵師の歌川広重が安政3年（1856年）から同5年（1858年）にかけて制作した連作浮世絵である。広重最晩年の作品であり、死の直前まで制作が続けられた。何気ない江戸の風景であるが、極端な遠近法や、俯瞰、鳥瞰などを駆使した視点、またズームアップを多岐にわたって取り入れるなど斬新な構図が多く、視覚的な面白さもさることながら、多版刷りの技術にも工夫を重ねてあり、浮世絵としての完成度は随一と言われている。実際に『大はし阿たけの夕立』や『亀戸梅屋敷』を模写したゴッホをはじめ、「ジャポニズム」の代表作として西洋の画家に多大な影響を与えたシリーズである。

9.ジャポニズムとは

今回は「東洋と西洋の文化の交流」をテーマにジャポニズムを取りあげ展示した。19世紀後半、『北斎漫画』が西欧に紹介されると、ブラックモン、ゴッホ、モネ、マネ、ドガなどが日本の美を発見してジャポニズムが広がり、フランスの印象派に多大な感銘と影響を与えたことは余りにも有名。その北斎もまた、西洋の絵画を吸収し、作風を変化させていった。このように数百年も前の黒船が日本に来る以前から、ヨーロッパと日本は文化的に深い関係を築いていた。ジャポニズムとは欧米で見られた日本主義のことである。単なる日本趣味ではなく、日本美術の造形的な特質を、自分の作品のうちに創造的に活かす態度をいう。19世紀末のオランダ貿易や万博の展示などをきっかけに、日本美術（浮世絵、琳派、工芸品など）が注目され、印象派やアールヌーボーの作家たちに影響を与えた。

ゴッホ.....歌川広重の『名所江戸百景』を模写した。

モネ.....浮世絵を背景に、着物姿でポーズをとるフランス人女性を『ラ・ジャポネーズ』（日本娘）と題して描いた。

ゴッガン.....『説教の後の幻影』のヤコブと天使が闘う姿は『北斎漫画』の相撲の図からの借用、画面を斜めに渡る幹の大胆なトリミングは歌川広重の作品からの借用であろう。

マネ.....『笛吹きの少年』に見られる形態の切り抜き、明快な平塗りや黒の輪郭線は浮世絵がヒントになっている。

ロートレック.....斬新なトリミングとモチーフの切断は浮世絵の影響、肥瘦のある一筆書きは墨絵の筆力、筆勢を学んだ為であろう。

ドガ.....ヨーロッパの伝統的な絵画には見られない思いがけない構図は、明らかに浮世絵の影響といえる。

アールヌーボー エミール・ガレのガラス作品に見られる花や虫、蝶などのモチーフとデザインに、日本美術の影響が色濃く見られる。

ルイ・ヴィトン ダミエキャンバスやモノグラムキャンバスは市松文様や家紋の影響だといわれる。

10.作品の輸送・管理について

筆者は、平成18年3月28日から4月5日まで渡欧し、会場並びに輸送方法につき検討と確認をした。また、自動温湿度記録装置「データロガー」による温度湿度の確認、照度計による照度調整等も同様に行った。作品が当館収蔵庫から空港を経て、現地に運ばれ展示され、欧州から戻って収蔵庫に収めるまでを計測した。また、作品は5点のみの展示となるので、検討した結果、機内手荷物とした。この方法が温湿度に関しては一番安全と思われた事と、作品を小荷物と判断したためである。また、通関上の問題が起こらないように事前にカルネ通関手続きを行い、法律上問題が起こらないようにした。

なお、平成18年から平成21年までの出品作品は下記の通りである。

年度	資料名	作者名
H18	富嶽三十六景（神奈川冲浪裏）	葛飾北斎
H18	富嶽三十六景（武州千住）	葛飾北斎
H18	富嶽三十六景（尾州不二見原）	葛飾北斎
H18	富嶽三十六景（東都浅草本願寺）	葛飾北斎
H18	富嶽三十六景（隅田川関屋の里）	葛飾北斎
H19	富嶽三十六景（凱風快晴）	葛飾北斎
H19	富嶽三十六景（神奈川冲浪裏）	葛飾北斎
H19	富嶽三十六景（甲州石班沢）	葛飾北斎
H19	富嶽三十六景（駿州江尻）	葛飾北斎
H19	富嶽三十六景（江戸日本橋）	葛飾北斎
H20	名所江戸百景（亀戸梅屋舗）	歌川広重
H20	名所江戸百景（水道橋駿河臺）	歌川広重
H20	名所江戸百景（亀戸天神境内）	歌川広重
H20	名所江戸百景（浅草田甫西の町詣）	歌川広重
H20	名所江戸百景（深川洲崎十万坪）	歌川広重
H21	名所江戸百景（亀戸梅屋舗）	歌川広重
H21	名所江戸百景（深川萬年橋）	歌川広重
H21	名所江戸百景（大はし阿たけの夕立）	歌川広重
H21	名所江戸百景（四ッ谷内藤新宿）	歌川広重
H21	名所江戸百景（上野山内月のまつ）	歌川広重

11.第1回展覧会について

平成18年9月8日～10日、ルクセンブルクにあるアンセンブルグ城を会場として、『葛飾北斎展』が開催された。本展覧会は、ルクセンブルク国文化庁の後援を頂いた。展示会場の外気温度、室内温度は、20～22度と日本の初秋を思わせる気候であった。

出品作品は次の通りである。

《富嶽三十六景》



展覧会会場外観



展覧会風景

《富嶽三十六景》



神奈川冲浪裏



武州千住



隅田川関屋の里



東都浅草本願寺



尾州不二見原

アンセンブルグ城および庭園見学が主であったため、北斎展はその途中に会場を準備した。作品は5点のみであるが、この作品に対しそれぞれ英語、フランス語、ドイツ語の翻訳文を掲示した。特に今回のポスターに使われた「神奈川冲浪裏」は世界中の人々から親しまれている有名な絵画の一つであり、作曲家ドビュッシーはこの絵に刺激され、交響詩「海」を作曲、初版楽譜の表紙をこの絵で飾ったという。

この度の『葛飾北斎展』は、ルクセンブルク国の文化庁より後援を頂き、準備を進めることができた。政府公認となったことでTV、ラジオ、新聞にも取り上げられた。アンセンブルグ城は近年改修工事が終了した。300年を越える建物の古風な風格を変えないように改修を行うことは大変困難であったが、無事に修復されたとの事である。また、アンセンブルグ城の近くにはルクセンブルクで一番古い橋があり、文化庁が改修工事を行っていたが『葛飾北斎展』の内覧会当日（9月7日）に竣工式が行われた。式典には文化庁長官が出席、終了後はアンセンブルグ城の庭園も見学された。展覧会の初日にはルクセンブルク国営放送からの取材があり、展覧会の様子が全国に放映された。会期中は晴天にも恵まれ、1200名の方々が北斎の観賞、講演「北斎とジャポニズム」の傾聴、また庭園の見学を堪能された。

12.第2回展覧会について

第2回は平成19年9月15・16日の2日間で行われ、約600名の方が観覧された。出品作品は以下の通りである。



展覧会垂幕



展覧会風景



抹茶のもてなし
《富嶽三十六景》



講演聴講者



凱風快晴



神奈川沖浪裏



江戸日本橋



甲州石斑沢



駿州江尻

平成19年はサミット首脳会議で決められたこともあり、環境問題に多くの国が取り組んでいた。その為ルクセンブルクは展覧会当日が「車を使用しない日」となっていた。さらに同国はEUの中で文化事業を推進する当番国にあたって多くの文化行事が重なったが、よくこれだけの方が観覧されたと思う。さらに北斎展の御来賓として大使館関係者、財界人など重要な方々が集まってくださり、ルクセンブルクのみならずEU諸国にかなりの情報を流して下さった。その為日本文化の紹介に非常に有益であった。また、内覧会でご来賓の村長が「このアンセンブルグ城、そしてこの浮世絵展は村の宝物です。文化交流、芸術交流に国境はありません。これを通してお互いが相手の国の良いところを学び、そして相手の国を理解することが大切であります。」と祝辞をくださったのが印象的であり、本展覧会の目的が十分達成できたと思う。

多くの来館者は、北斎の本物の作品を見て驚き、パワーポイントを使用した展示解説を聞かれ、欧州と日本がジャポニズムを通して関係が深かったことを知って感嘆され、更に、日本の抹茶のもてなしをたいそう喜んで下さった。小規模の展覧会ではあったが、十分に日本文化の紹介になったと自負している。

なお、第3回は平成20年9月19日～9月21日、第4回は平成21年9月18日～9月20日まで『歌川広重 名所江戸百景展』を行ったが、全ての展覧会も盛況のうちに終了した。また、内覧会にも在ルクセンブルク、フランス、イギリス、チェコ、ポーランド各大使館関係者が参列され交流が図れたことは好ましい事であった。出品作品は次の通りである。



展覧会垂れ幕



展覧会風景

《名所江戸百景》



亀戸梅屋舗



水道橋駿河台



亀戸天神境内



浅草田雨西町詣



深川洲崎十万坪



深川万年橋



大はし阿たけの夕立



四ッ谷内藤新宿



上野山内月のまつ

13.今後の展望として

この展覧会は、東洋の西洋の架け橋、東洋と西洋の交流、東洋と西洋の融合を目的としたものであった。そして、図らずもルクセンブルク国文化庁が後援についてくれた事により新聞、ラジオ、テレビも取材・報道してくれた。また、4年目となった2009年にはアンセンブルグ城の庭園を見に来たのではなく、この歌川広重『名所江戸百景展』を見に来た方が多かったことは、毎年行ってきたこれらの展覧会がルクセンブルクに浸透してきたことの証であり、とても有難いことであった。

ルクセンブルク在住のご夫妻が「家宝に浮世絵があるから鑑定して欲しい」と1点持ち込まれた。この作品は「名所江戸百景」の「湯島天神坂上眺望」であった。図録で説明すると「色が違う」等言われていたが「保存と劣化」「色落ち」について説明しご納得頂いた次第である。恐らく、ルクセンブルクにこれらの浮世絵版画が展示された事は初めてではないかと思われた。なぜなら、隣国のフランスやオランダ、ベルギーのような大国ならば葛飾北斎や歌川広重の展覧会も開催される機会が多いと思う。しかし、ルクセンブルクのようなヨーロッパの小国で、かつフランスやベルギーなどに囲まれている国はなかなか展示されるチャンスがない。電車や車で乗れば、すぐにフランスやベルギーへ行き展覧会を見ることが可能だからである。

最後に改めて感じたことは、文化・芸術の交流に垣根はないということである。また、日本よりヨーロッパは文化レベルが高く、幼少のころより芸術・文化に親しんでいるということである。これがその国の文化力になるのだろうか。

光記念館では今後とも、世界各国の美術館と連携をとり、諸外国と日本の相互理解、東西文化交流の架け橋となり、世界平和に役立つような展覧会活動をしていきたい。また、浮世絵のみならず、当館に多数所蔵されている東洋独自の文化『書』展なども行い、ヨーロッパだけでなく、北米やラテンアメリカなども視野に入れた活動を行いたい。

参考資料



過去への探索 wort紙記事訳

アンセンブルグ城では、日本人画家、広重の浮世絵の展示会があり、それは一人で空想にふけたい散歩好きの人々に親しまれた。

18世紀に創られた「フランス様式」の見事な庭には、詩的な美しさの宝物がたくさん閉じ込められている。広大なプラタナスの木が庭を支配する一方では、エイシュ川沿いのクマシデの並木道の木陰。そして庭園の植込み、迷路と噴水は、夢のように美しい景観を演出している。

段になっている庭の建築様式は様々なシンボルを使って、その場所を創った人々の歴史を物語っており、庭園の草木の葉の隙間から読み取ることができる人はその伝説が感じられる。

ルクセンブルグの建築遺産を再発見する新たな一つの方法である。

「我が国の過去と現在を再発見」

本日と明日（9月20、21日）、ルクセンブルグ公国とその周辺地域（嘗ての「大きなルクセンブルグ」1）では、欧州通産記念日の25周年を祝う絶好の機会を得ています。

今年の通産記念日のテーマは「遺産と探求」。来訪される方々には多くの選択肢があります。ルクセンブルグの過去と未来を（再）発見するチャンスがこの特別な日に提供されているのです。この機会に、ぜひ多くの価値ある場所を訪問されてはいかがでしょうか。

アンセンブルグ（城）は17～18世紀、製鉄所を所有していたマルシヤン家とアンセンブルグ家の居城で、バロック調の庭園に囲まれています。城の入口で、ガイド付きのツアーの時刻表が載ったポスターが見られます。著名な地形画家・広重による「江戸百景」シリーズより日本の木版画の実物5点も展示されております。

アンセンブルグ域内、またバロック庭園など、公的・私的部分も含め多くの場所が公開されています。この通産記念日の機会に門戸を開き、展示会やガイド付きツアーなどを提供しています。

1)「大きなルクセンブルグ」(Greater Region)は、ルクセンブルグ大公国、ロレーヌ・フランス地域、ワロニー・ベルギー地域、そしてレナニー＝バラティナ・ドイツ地域を含む、嘗て大変繁栄していた頃の『ルクセンブルグ』です。

**Journées Européennes
du Patrimoine
samedi 19.09.2009
dimanche 20.09.2009**



Lieux de plaisir et d'agrément



Service des sites et
monuments nationaux

Organisation
Ministère de la Culture,
de l'Enseignement supérieur et de la Recherche
Service des sites et monuments nationaux
26, rue Minder
L-2140 Luxembourg

Renseignements
Tél: (352) 478 44 50
Fax: (352) 46 17 79
e-mail: monique.becker@monn.state.lu

Photos
A. Langin, A. Bruns, M. Joris, G. Hoffmann, J. Braun,
I. Bernard-Lucius.



L'Europe, un patrimoine commun
sous les auspices du Conseil de l'Europe
et de la Commission Européenne



A l'initiative du Conseil de l'Europe et de la Commission
Européenne, les Journées Européennes du Patrimoine ont lieu
depuis 1991 au mois de septembre dans une cinquantaine de
pays. Elles invitent tous les amateurs à visiter des monuments
historiques et à prendre conscience de la richesse et de la
valeur du patrimoine.

Le Service des sites et monuments nationaux remercie toutes
les personnes, associations et institutions qui ont contribué à
l'organisation des Journées Européennes du Patrimoine 2009.

ANSEMBOURG

Grand château

Résidence de maîtres de forges et château de plaisance aux
XIX^e et XX^e siècles. Magnifique jardin baroque agrémenté
de fontaines, de bosquets, de statues et d'une chapelle
monumentale.

- samedi 19.09.09, dimanche 20.09.09
jardins ouverts toute la journée
- samedi 19.09.09
visites guidées: 10h00 (F), 11h30 (GB), 14h00 (F, D), 16h00 (F, D)
cf. plan Tourisme, G. Demerloo, H. Laifongel
café du château: 14h à 18h00
- dimanche 20.09.09
visites guidées: 10h00 (F, D), 11h30 (F, D), 14h00 (F, GB), 16h00 (F)
percours découverte du patrimoine naturel: 11h30 (D, Demerloo)
visite du jardin potager: 14h00 (F, Adams)
café du château: 14h à 18h00
- vendredi 18.09.09, samedi 19.09.09, dimanche 20.09.09
exposition d'objets d'histoire naturelle (3.747-1848)
musée: 11h à 18h00
- dimanche 17.09.09 à 19h00
projection d'un documentaire sur l'influence de Heringer
sur l'art européen (Takeshishi)

BECKERICH

Moulin 181, Harensterville

Propriété de l'abbaye noble de Claufontaine sous l'Ancien
Régime; aux XIX^e et XX^e siècles, moulin à farine, scierie,
distillerie, réaménagé en centre culturel et touristique aux
multiples activités.



ルクセンブルク・EU歴史遺産記念日パンフレット (H21年)

博物館における教育普及 ～歴史系ワークショップの一考察～

松本庸子

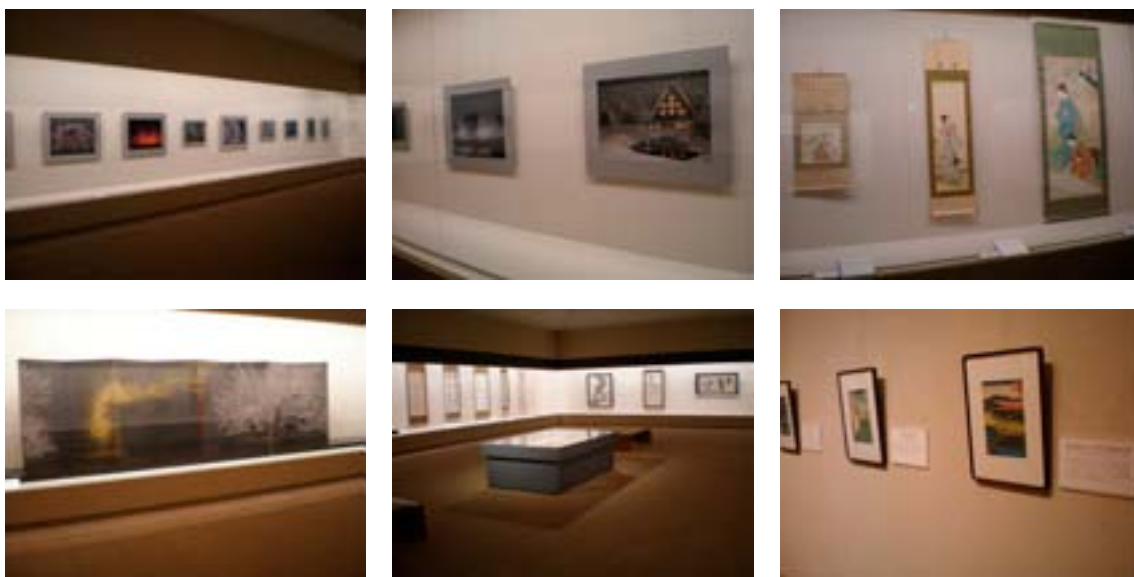
光記念館 学芸員

はじめに

博物館において体験学習が取り入れられるようになったのはいつ頃だろうか。まず資料の陳列に始まり、資料の特徴を伝える資料ネームや歴史・文化的背景を伝えるグラフィックや映像が展示に加えられていく中、ここ数十年の間に体験学習という手法が取り入れられるようになったと考えられる。始まりはアメリカの子供ミュージアムともいわれるが、確かに子供は難しい知識ではなく実際の体験から学ぶことがほとんどだと思う。

博物館や美術館は「敷居が高い」「動かない」「わからない」といったイメージも強く、敬遠される方も多いと思う。今後の博物館にはハンズオン、プットオンの展示を大いに導入し、子供や初心者にも優しい展示の補助が求められていると感じる。

《一般的な展示の様子》



体験学習の種類

体験は人間の五つの感覚器官（目・耳・鼻・舌・皮膚）が外界の刺激を受けて感じ取る五種の感覚（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）によって経験することで記憶に残り、展示への理解も深まる。

視覚では資料の色や形・質感を見せるだけでも多くの情報を提供できるが、実物や模型以外にも文字・イラスト・動画などの様々なアプローチが行なえる。しかし、情報量が多いと来館者を疲れさせてしまうから、展示する側も厳選した情報を効果的に提供できるよう工夫が必要となる。ライティングや色バランス、無の空間を作ることなども視覚情報を整理する補助となっている。

聴覚では音声による展示解説を導入している他、音楽や自然界の音など効果的な情報提供が可能である。ここでも他の情報と喧嘩しないようにしないと来館者に不快感を与えてしまう。うるさくならない程度に心

地よいBGM的なものでも良いと考えられる。学習意欲を促進できれば十分役割を果たすといえる。

嗅覚は例えば、古代からある香料などを嗅ぐことで日常生活で体験した香りと比較しながら想像力を高められる。味覚も同様である。ただし、博物館内での飲食は行えない現状があるので、飲食で体験学習を行う場合は調理師などの資格を持つ方との連携や博物館のレストランや特別講座の中での運営を検討したい。

触覚も手や肌で実物資料や参考資料に触れることで、その物の質感や温度、構造などから多くの感動を得ることができる。考古資料は古代の人々が生活の中で活用した道具であるので、触ってみないと理解できないことも多い。もちろん劣化の激しい資料を体験学習に使用するわけにはいかないが、体験可能な方法は今後も検討していくべきだろう。

体験学習は経験の種類を増やすことで多面的な学習が行え、楽しく理解を深められるので、今後最も期待されていく分野ではないだろうか。



版画を刷る



復元資料を見る



香水をかぐ



楽器を弾く



香料をかぐ



衣装を着る



実物資料に触る



昔の道具で火を起こす



衣装を着る

常設の体験学習

光記念館人類史常設展では体験学習コーナーに「古代文字のスタンプ」を設置した。古代文字は絵文字なので人気があるが、表現が複雑で理解は難しい。そこで体験学習では気軽に押せるスタンプにしてみた。エジプトのヒエログリフスタンプはアルファベットに対応しており、ローマ字表記で来館者の名前などを設置してある用紙のカルトゥーシュ（古代エジプトで名前を書き入れた枠）内に捺せるようになっている。マヤ文字スタンプは数字で来館日や誕生日を捺したり、マヤの古代都市の紋章を捺せるようになっており、十年間設置し続けているが現在も老若男女を問わず人気が高い。スタンプは気軽に参加できるからか、どのジャンルでも人気が高く、最終的には展示室の各ケースごとにスタンプを設置してスタンプラリーにし、参加記念シールを用意したら親子で参加するケースが増えてきた。

また、同じコーナーに開館時から設置している「土器の立体パズル」も人気が高い。考古資料は長期間土

に埋まって形が崩れているものが多いので、そうした破片からの復元を体験してもらうものだ。電磁石でくっつけて、90秒間で電磁石が切れる仕組みになっているので、ゲーム感覚で楽しんで頂いている。縄文の火炎土器とアンデスの鍔型土器を設置したが、土器片に凹凸や重みの多い火炎土器の方が復元も難しく人気も高い。

各古代文明のクイズも9ジャンルあり、5問の画像や音声入りQ&Aをタッチパネル形式で解いていく。10ヶ国語に対応できるようにしたが訳が間に合っていない言語も多く、問題内容も偏っているので改善していきたい状況だ。

カウンターに設置してある遺跡・遺物のフィギアも興味を持つ来館者が多い。最近のフィギアは種類が豊富で質も高いので様々な年齢層に親しまれており、手に持っているような角度から眺められるので関心も高まるようだ。



古代文字スタンプ



土器の立体パズル



カウンターのフィギュア



Q&Aタッチパネル



アンデスの楽器



スタンプラリー



電飾地図

企画展の体験学習

平成14年「縄文の耀き」体験学習コーナーには縄文土器・土偶のスタンプ、マスコットの他に実物の土器片に触れるように設置し、土器片の裏面に地域・時代名を貼って同じ縄文時代でも時期や場所で文様や焼き方や土の種類、厚みにも違いがあることを手で触れて体感して頂いた。

また、土器の文様がどのように付けられたかを体験してもらうため、筒型に粘土を貼り付け、縄・木・竹・貝殻などの道具と参考パネルなどを設置した。

縄文の体験学習で一番人気が高かったのは、まいぎり式の火おこし道具だった。火が出ないように細工はしていたが、それでも焦げ臭くなるくらい夢中になって回している人が特に男性に多かった。

土日の体験学習では、参加費100円のオープン粘土の勾玉づくりと参加費無料の遮光器土偶のお面作りを同

時開催した。勾玉はカラフルな粘土を2色混ぜて自分で形を作るが、手軽な上に完成度も高かったので老若男女を問わず人気があった。お面もドライフラワーや木の実を貼り付けるもので、幼児連れの家族に喜ばれた。

平成15年「古代マヤ文明展」は毛糸でミサンガ作りをやった所、好評ではあったが時間がかかったり上手く編めない場合もあり、万人向けとは言い難かった。マヤカレンダーや石碑拓本のスタンプも作ったが、少々難しすぎたように思う。

平成17年「インカ文明展」は主任が現地調査でアンデスの楽器類（サンポーニャ・レインスティック・パーカッション類）や復元資料（キープ）、食品（豆・とうもろこし・チューニョ）などを入手してくれたので、来館者の関心も高まった。石や動物のパズルも幼児に喜ばれたが、最も人気が高かったのは民族衣装を着る写真撮影コーナーだった。マチュピチュの大型写真を背景に等身大のリヤマぬいぐるみを設置し、アンデスの民族衣装を着て写真撮影できるようにしたら、ほとんどの来館者が参加してくれたようだった。また、土日の体験学習では参加費100円で金属板を加工するアクセサリーづくりを行なって喜ばれたが、完成度は今ひとつだったと思う。

平成19年「エジプト展」は常設の文字スタンプの他にパピルスの立体パズル、死者の書すごろく、香水コーナー、飛び出す絵本などを設置した。エジプトは古代文明の中でも一番人気が高く、来館者も積極的に体験学習に参加していた。特に人気が高かったのはツタンカーメンの部屋とやはり衣装コーナーだった。衣装はファラオと女王の衣装が人気があり、小道具まで大いに活用されていた。

平成21年「シルクロード展」では各地の挨拶スタンプや楽器に触る・シルクに触る・古代の香料を嗅ぐ・衣装コーナーなどそれぞれ人気があったが、バザールコーナーではいろいろな商品が異国で販売され、交流している雰囲気が出ていて楽しんで頂けたようだ。

尚、企画展で活用した体験学習はその後に常設展でも入れ替えながら活用している。

《マヤ体験学習》



ミサンガ



ミサンガ作り

《インカ展体験学習》



アンデスの楽器



シルバーアクセサリー



金細工

《エジプト展体験学習》



ヒエログリフ



顔出し撮影



パズル



すごろく



プラ板ストラップ作り



光るピラミッド作り



金細工作り

《シルクロード展体験学習》



飛び出す絵本



スタンプ



楽器



香料



シルクに触る



バザール



衣装



衣装を着る



衣装を着る

今後の体験学習

異国の古代文明は想像しきれない部分も多く、理解を深めるには五感で感じる体験学習は今後も必要と思われる。その内容は衣食住など日常生活に近付けた物の方が来館者の関心も高く、入りやすいことが分かってきた。記念に残る物を作る事も楽しんだり感動したりすることで長く記憶に残り、学習したことが生活の中で活用されていくと期待している。体験学習とは日常の実体験に関連付けていくということなのかもしれない。

また、体験学習の一環として学校へ出張講座を定期的に行なってきたが、好評を頂いている。出張美術館では浮世絵の作品を学校まで持って行って、その絵の内容や時代背景、顔料の種類や当時のファッションや生活用具などに触れながら学習して頂いている。特に実際に版画を刷る時は参加者の笑顔が絶えない。

出張歴史館では縄文時代について考古資料の解説・縄文ファッション体験・縄文食を作って食べる・火起こし体験などの体験学習を学校の先生と連携して小グループに分けて実施したが、とても好評だった。教科書で文字やイラストを見るだけでは理解できなかったことを学べていると思う。

今後の体験学習は展示資料の歴史背景を楽しく・分かり易く学ぶ補助としてさらに改良されるべきと思う。また、博物館内に留まらず地域社会や学校と連携し、人々の成長や生涯学習に貢献できるものを模索する事が非常に大切になって来ると考えられる。



浮世絵に見られる帯結びについての一考察 ～光記念館肉筆浮世絵コレクションから～

今泉たまみ

光記念館 学芸員

はじめに

光記念館では約220点の浮世絵版画と、約420点の肉筆浮世絵を所蔵している。浮世絵とは元来、うきよ（当世）の風俗を江戸庶民の視点から描いた絵のことであり、現代の私たちはそこから江戸時代のまちの情景や人々の暮らし、文化といったものをつぶさに見て取ることができる。また、当時浮世絵は報道性を有する重要なメディアの一つであり、最新情報や流行を伝達していたとも言われている。

浮世絵には浮世絵版画と肉筆浮世絵とがあり、浮世絵版画は安価で大量に出回ったことから、江戸の庶民が簡単に手に入れることができた。しかしながら木版画では、仮に流行の豪華な衣裳を表すといった場合限界があった。これに対して肉筆画は、版画に比べてはるかに細かく繊細な部分の表現が可能であり、人物の髪の毛一本一本、着物の鹿子模様の一つ一つまでが丹念に描かれたのである。

当館では平成18年に『お江戸のファッション展 ～其の一 着物編～』と題した特別展を開催し、当館の肉筆浮世絵コレクションから、江戸時代の着物の着こなし・色柄・流行等をテーマに展示を行った。

ここではその中から帯結びについて考察してみることにする。但し、繊細な表現が可能な肉筆浮世絵であっても、立体的に結ばれた帯を平面に表現するということの難しさや、絵の主体が帯ではないことなどから、結び方は断定しがたくあくまでも推測に過ぎないことを断っておきたい。



一つ結び

一度結んで二つ折りにした「一つ結び」は、晴れの日も褻の日も、また一般子女に熟年女、芸妓から年老いた女性に至るまで幅広く着用された。帯端を引くだけですぐに解けることから「ひっかけ結び」や「浮気結び」等ともいわれる。室町から江戸時代初期には幅が狭く丈も短かった帯が、元禄（1688～1704）の頃になると幅も広く丈も現代の帯（4m30～50cm）のように長くなった。毎日を着物で過ごした当時は、汚れたり擦り切れたりすると帯を短く裁断して更に愛用したらしいが、一つ結びなら短い帯でも結ぶことができた。

「梅を見る女」
簗堂（西村・石川派）
〔江戸時代中期〕宝暦～明和（1751-72）頃
880mm × 328mm



扱き帯

柔らかな布を巻いて結んだものを「扱き帯」といった。遊女の前結びに多く見られる。この絵が描かれた宝永から正徳（1701～16）頃のしごき帯には、華やかさとボリューム感があった。

「立ち美人」
作者不詳（懐月堂派）
〔江戸時代中期〕宝永～正徳（1704-16）頃
1034mm × 453mm



片わな結び

帯には片方だけ輪を作る片わな（方輪）結びと蝶々型の諸わな（双輪）結びがよく用いられた。

「片わな結び」には、左から右へ巻く関西流と右ら左へ巻く関東流とがあり、関東では「熨斗結び」とも言われる。歌舞伎の元祖と言われる出雲の阿国が絵の中で結んでいるのがこの「片わな結び」である。

「帯に短し襷に長し」という諺があるが、「諸わな結び」はバランスが難しく、長くても短くても困る結び方であった。だんだん帯幅が広がって、諸わなを結ぶには無理が生じるようになると、体に巻く部分と諸わなの部分を別々に仕立てる「作り帯」が生まれた。

「灯籠を持つ遊女」
作者不詳（菱川派）
〔江戸時代前期～中期〕
869mm × 154mm



カルタ結び

この帯結びは、カルタを3枚並べたような形を特徴とする「カルタ結び」だと思われる。ポルトガルから来たカルタが名前の由来だが「石畳結び」とも呼ばれ、延宝から天和（1673～84）にかけて最も流行した。

帯は本来背面から回して前で結ぶという形をとってきたが、帯幅が広がってくると次第に後ろ結びとなり、江戸時代後期には晴れの日や儀礼時に前結びが残ったものの、後ろ結びが定着した。そしてこの「カルタ結び」は帯幅が広くなるにつれ廃れていった。

「立ち美人」
古山師政（菱川派）
〔江戸時代中期〕
宝永～延享（1704-47）
670mm × 253mm



吉弥結び

「吉弥結び」と思われる帯結びである。祇園にお花見に行こうとした歌舞伎役者 上村吉弥は、東院洞浮世紺屋のお春という娘が、帯を唐犬の耳が垂れるような形に結んでいたのを見て大変興味を持った。そして5寸（15cm）幅の帯の端を片わなに結び、垂らして鍾を入れて真似てみた。吉弥が舞台にこの広幅帯を結んで出たことがきっかけとなり、寛文～延宝（1661～1680）の頃に大流行した。

「枕持つ女」
月岡雪鼎（月岡派）
〔江戸時代中期〕宝永7年～天明6年
（1710-1786）
970mm × 267mm



水木結び

歌舞伎役者 水木辰之助は、当り芸「槍踊」と猫の所作を演じて江戸中の人気を集めた。所作事は当代随一といわれたが、面体はあまりすぐれていなかったという。背が高かったため、「吉弥結び」ではバランスが悪く、帯端を長くしたところ「水木結び」として定着したとの説がある。

「人形を遣う娘」
作者不詳（西村・石川派）
〔江戸時代中期〕
665mm × 251mm



平十郎結び

女形役者 村山平十郎によって流行したという「平十郎結び」はいわゆる堅結びで、片わなに引き結んだ帯を垂直に立てた華やかなもの。幅が広く、丈も大きくなった帯が見栄え良く結べた。少女や若年の子女に多いが、武家、町方、遊里でもその姿は見られた。

「人形を遣う娘」
作者不詳（西村・石川派）
〔江戸時代中期〕
665mm × 251mm



はさみ帯

結んだ帯をたたんで、前や脇あたりで適当に挟むだけの「はさみ帯」は、「さし込み帯」「突っ込み帯」とも言われる。すぐに解けることから遊女がよく結んだが、一般男女にも見られた。ただ、遊女の「前ばさみ」と武士が腰にしっかり結ぶ「片ばさみ」とは似て否なるもの。武士の「片ばさみ」は武士精神のゆるみをしめ直すかのように帯の結び目の根元までしっかりとさはさみ込むが、遊女の「前ばさみ」はほどこやすいように帯端を残してはさむ。

「文読む女」
西崎竹窓（菊川派）
〔江戸後期〕
955mm × 280mm



昼夜帯

明るい色と黒を表裏に組み合わせた両面兼用の帯を「昼夜帯」といい、黒と白の組み合わせを「鯨帯」といった。「鯨帯」は主に年配の女性が使用したという。

これらの帯には、光沢がサテンのように美しい黒縹子が使われた。縹子織りは、平織り・綾織りと共に織物の三原組織といわれている。戦国時代に中国の製法にならって京都で織り始められたという。江戸時代に早くから黒縹子を帯として締めたのが、遊女と武家社会の家来の奴さんであった。そして次第に黒縹子の役割は、表から裏へ移っていった。

「美人立姿」
菊川英里（菊川派）
〔江戸時代後期〕文化～文政（1804-29）
955mm × 280mm



島原結び（俎板）

遊女の帯結びは、上方の島原で「島原結び」、江戸の吉原では「俎板」といった。「俎板」の名前の由来は、俎板のように厚いからとか、遊女は定めに逆らえない“俎板の上の鯉”だから等といわれる。幅2尺、長さ4尺（60cm×120cm）余りの大版画のことを俎版というように、それ位の大きさのことをこの時代は俎板に例えたようである。

「遊女と禿」
琴風舎豊麿（喜多川派）
寛政（1789-1800）
955mm × 280mm



矢の字結び（立矢結び）

「矢の字結び」は本来、江戸時代に武士に仕える腰元が、白地に紫の矢羽模様の着物に黒緇子の帯で結んだ結び方である。矢羽模様の着物に結ぶ帯ということで“矢の字結び”という名が付けられたといわれている。立矢結びともいう。
斜めに傾けて結ぶ「矢の字結び」は室内では右から左、外出時は左から右と結び方を変えるのが通常であった。江戸時代、武士が妻子に懐剣を持たせる事は幕府も公認していたが、室内で刀を抜くことはご法度であり、室内での「矢の字結び」には右肩の動きを封じる意味があったといわれている。

「座敷の二美人」
喜多川長麿（喜多川派）
文化（1804-17）
927mm × 388mm

以上、浮世絵に描かれた江戸時代の装いから、帯結びについて述べてきた。浮世絵から江戸の文化・風俗を推測したりあるいは裏付けたりすることは、まだまだ研究・開発の余地有る分野であり、今後も当館のコレクションをもとに、更に調査・研究していく所存である。

特別展「お江戸のファッション展」の開催にあたり、お忙しい中をご指導・ご協力下さった着物研究家滝沢静江先生（滝沢静江きものアカデミー校長、日本着装文化伝承協会会長）に、この場を通して心から感謝の意を表したい。

終わりに

当館では、かねてから浮世絵に興味の無い人にも浮世絵を見る機会を提供したいと考えていた。通常の展示とは違う切り口で浮世絵を見せることにより、来館者に少しでも興味・感心をもって頂き、浮世絵の面白さに気付いて頂きたいと願って取り組んだのがこの特別展である。そこで若者や女性たちにファッション雑誌をめくるような感覚で見て頂こうと、今回は解説文に志向を懲らした。最後にその解説文を3つ程提示しておく。

コラボ企画！ 歌舞伎マニア必須アイテム ついに登場！（^▽^）»☆

正品あでやか系デザインの着物に、インパクト重視の帯がおしゃれな組み合わせ。この存在感ある帯の模様は、佐野川市松の正方形モノグラム「市松模様」と、九代自市村羽左衛門の渦巻模様「亀藏小紋」のコラボデザイン！それぞれ超有名な主役柄。歌舞伎役者ファンじゃなくても、誰でも知ってるデザインで注目度NO.1！スパイスを効かせた装いで、華やきオーラ全開！

【市松模様】江戸時代から伝わる模様の中でも、現代まで最も知られているであろう「市松模様」は、濃淡の異なる2色の正方形を互い違いに並べたもので「霞模様、石雲模様」とも呼ぶ。寛保元年春、中村座へ下った佐野川市松が市松模様の袴を着て舞台に登場。その華やかさが評判となり、市松模様を身に付けない女性はいない程に流行。

【亀藏小紋】亀藏小紋とは渦巻き模様の事。宝暦ごろ活躍した九代自市村羽左衛門は前の名を亀藏と言った。後の渦巻き模様の舞台衣装が粹だとして流行し、亀藏小紋の名で知られる。

ワンタッチなお手軽結びで らくちんカジュアル！ （n_n）

花柄をクールカラーでカッコよく！ポイントになる「はさみ帯」で抜群のナチュラルバランス。結んだ帯をたんで挟むだけのシンプルアレンジだから、どんなスタイルもおまかせ。挟み方は至って簡単！お腹に巻いた帯を前や脇あたりで適当に挟むだけ。別名「さし込み帯」「突っ込み帯」と表現するお手軽さも◎。忙しい遊女に持ってこいの、らくちんカジュアルで身も心もリラックス！

すぐに解けることから遊女がよく結んだが、一般男女にも見られた。ただ、遊女の「前ばさみ」と武士が腰にしっかり結ぶ「片ばさみ」とは似て異なる物。武士の「片ばさみ」は武士精神のゆるみをしめ直すかのように帯の結び目の根元までしっかりとさみ込むが、遊女の「前ばさみ」は解きやすいように帯端を残してはさみ込む。

き 斬りつけ防止?! ニュアンス美人が もう常識！ $\kappa(\sigma_\sigma)\kappa$

大きな帯が個性的！武家の定番「矢の字結び」は斜めが粋な斬新結び。お部屋の中では右から左、お出かけスタイルは左から右へチェンジするのがジョーシキ。幕府公認！武士は愛する妻子に懐剣を持たせていた。お部屋で刀を抜かない様に、結び方にも動き封じのちょっとアレンジ。意味あり帯に絵師も思わず強調！！

矢の字結びは本来、江戸時代に武士に仕える腰元が、白地に紫の矢羽模様の着物に黒緇子の帯で結んだ結び方である。矢羽模様の着物に結ぶ帯ということで“矢の字結び”という名が付けられたといわれている。

参考文献

『小針コレクション 肉筆浮世絵全解説』 菊池貞夫・鈴木浩平 監修

『着物の織りと染めがわかる事典』 滝沢静江著 日本実業出版社

『日本人の歴史 第六巻 装いと日本人』 樋口清之著 講談社

『ヴィジュアル百科 江戸事情 第六巻 服飾編』 樋口清之監修 雄山閣出版

平成20・21年度 光記念館 研究紀要 人文科学 第6号

平成22年4月1日発行

編集・発行 光記念館

〒506-0051 岐阜県高山市中山町175

TEL 0577-34-6511

FAX 0577-34-6065

<http://www.h-am.jp>